

内科・糖尿病内科 担当医師 井口昭久教授の随筆が掲載されました。

(名大医学部学友時報 第735号 2011年4月22日発行)

人生
山あり谷あり

第5回 「迷子」

名古屋大学名誉教授
愛知淑徳大学教授

いぐち あきひさ
井口 昭久

名大にいた頃、私には秘書がいたが、今はいない。

毎日郵便物の整理をしている。送られてくる雑誌を書棚に収めるのだが、どの棚も隙間がなくなった。古い雑誌を捨てないと新しい雑誌が入らない。古い順に捨てるのは簡単であるが、捨てたくない号も混じっている。多くは置いておく価値はなさそうだが、捨てるのは心配である。並んだ雑誌の上の隙間に差し込んでいたが、その隙間もなくなってきた。

古い記憶も捨てないと新しい記憶が入らない。私の記憶装置は貯蔵されている記憶を古い順に消去してくれない。苦い思い出は事細かに入力されていて、削除ができない。

名大の教授であった時、会議があってロンドンへ行った。医学部の教授5人と、M先生だった。医局員のM先生だけが頼りであった。

ロンドン市内を見物しようということになった。M先生が、赤い二階建ての観光バスの切符を手渡ししながら言った。「私は留学時代の知人に会いに行きますので先生たちだけで行って来てください」。私たちは付き添いなしのロンドン見物をするようになった。教授だけの集団になった。

赤いバスに乗っている時にK教授が大きな声を出した。「M先生だ!」。M先生は違う観光バスに一人で乗っていた。教授たちが面倒な要求をあれこれ出すので彼は別の行

動を取りたかったのだった。

一人旅であればそれなりの覚悟はするのであるが、誰かと一緒だと、面倒を見てもらうことに慣れていた。

バスを降りて地下鉄に乗ってデパートへ行った。一番足の早い者が一番先を歩きその後ろを二番目に足の速い者が歩いて行った。自分のことが精一杯で、他人のことなど考える余裕はなかった。

ハロックスというデパートへ入った。クリスマスの前のおとぎの国のようなであった。K先生が私に言った。「このセーター買うといいよ。」私は買うことにした。セーターを手にして周りを見渡せば先生たちの集団はその周囲にはいなかった。

田舎の小学校の修学旅行で東京へ行って、デパートへ行ったことを思い出した。エレベーターは初体験であった。エレベーターに乗るにはお金が要ると思った貧乏な家の小学生は、隊列を離れて階段を上った。そして迷子になった。小学校の先生は、必死になって迷子を捜した。

ロンドンのデパートで、私は迷子になった。教授たちの集団は私が迷子になっていることすら気がついていなかった。

付き添いのいない教授の集まりは、先生のいない小学生の集まりであった。